

私の農学概論

■農学における人間の研究

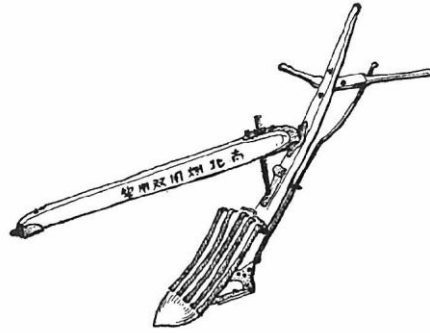
菱沼達也 著



私の農学概論

農学における人間の研究

菱沼達也 著



農山漁村文化協会

は し が き

まず、自分のことだが、若い時は実験をしたり、調査をしていると面白くてしょうがなかった。問題の泥をひと握り持ってきて実験していると、そのひと握りが自分には宇宙全体のようにも思えた。もちろん、たいした実験ではなかったが、熱中した時に、そう感じたことは事実である。また、農家に調査に行った時も、同じようなことが感じられた。

私が、はじめて調査をしたのは戦前、馬の大きさと、それを飼っている農家の経営田畑面積との関係であったが、馬の体高と田畑面積との間に予想した関係が見つかった時は、本当にうれしかった。そして、しばらくは、そういう喜びに我を忘れて、これが、農学に生きる者の喜びだと思っていた。

けれども、私自身だんだんそういう喜びだけでは満足できなくなってきた。なぜ満足できなくなったかというと、こうである。明治の末年、山形の寄生地主の孫として生まれ、昭和初期の、小作農家が娘を売らなければならなかったほどの深刻な農村不況の時期に青春を過ごした私は、自分がその渦中にいたわけではないが（私の父は小さな町の開業医だった）、生産的な役割を全く失い、乱れた生活を送って家庭を破綻させていた寄生地主の暗さを身をもって知り、私自身に巢食っている心の暗さも、結局はこういう地主の暗さと無関係でないことを知って、この暗さからの脱出は、貧しいけれど

も明るい生産農民の中へ帰って行く以外に道はないと感じていた。その後、千葉医科大学を追われて一時は千葉県の農民運動に参加したが、挫折した後もこの考えは変わらず、なんとか村の中へ住みつこうと思って獣医をめざしたのが農学へ転じた動機であった。

島木健作の小説『生活の探求』が出たのは昭和一三年であるが、あの主人公の考えは私も含めた当時の一部の青年の共通の願いだつたのである。けれども、昭和一五年に東大の獣医学科を出た私は、農林省の馬政局に入り、それ以後、研究者という役人の道を進んで今日に至っている。しかも、やっぱり農村に帰りたいたいという願いはなくなりはない。いや、今の大学を定年退職したら、今度こそ可能な形で農民の間に帰ろうと思つてゐるのだが、正直にいうと私の心には、その日が近づくとつれて、本当に自分は農民の中に生きることができるとかという不安が募つてきた。そして、これまで自分がかんだ農学に生きる喜びは、この不安を消すには、あまりにも小さなものであることがわかつてきたのである。

それに、もう一つ。この淋しさをいっそうかきたてたものが教師としての無力感であつた。すでに講義を始めて一九年になるのに、学生に対して私の講義は、ほとんど感動を与えることができないのである。誇張したいいい方だが、少なくとも学生たちは、今日、世捨人みたいな気持ちで卒業して行く。たとえば、私が「農業を改善するには農民を尊重して、その希望にそわなければいけない。農林省の農業構造改善事業は、土地改良も、機械の入れ方も、作目の選択も、多分に天降りのだから失敗

が多い」といえば、学生は「それはよくわかるが、今の官庁に天降りを止めろなんていうことは土台無理である。農民が農林省のやり方に憤慨するのは当然だが、実際問題として、卒業後もし農林省に就職すれば、私はやはり自分の生活のために出世しなければならぬから、農民のいやがることも、どしどしやらざるを得ない。世の中はそういうものでしょう」という。

彼らにとっては、私の感じた農学の喜びなんか、もはやまともな人生を考えさせる何の力もないのである。といって、自分は寄生地主の孫として、こういう心境だから諸君も考えてごらんなどといつても、しかたがない。もちろん、全部の学生がこういう心境でもないし、また、たとえ学生たちがこう考えたからとて、それを全部自分の教育の責任にするのは、むしろ、ぬぼれであると思うけれども、それにしても私は自分自身の浅薄さを痛感しないわけにいかなかった。考えてみれば、いざとなつて農民の中に行くことをためらう気持ちのある自分に学生をふるい立たせる力のないことは当然だともいわなければならぬ（なお、これは昭和四四年を頂点とする大学紛争以前のこと、私自身は学生のこういうなやみが紛争の大きな一因であつたと思つてゐる）。

一方、同僚の教師仲間はどうか。なるほど仕事をする人はいる。けれども、実際の農業とのつながりは、あまり考えていない。考えても、それは不徹底であつて、むしろ、実際の農業とあまり関係させない所に学問の位置づけをしているようである。そういえば、私は、農学部のある学生時代、教授から何べんとなく「実際の役に立てようと思つて学問をしてはならぬ」と聞かされたことを思い出す。そ

して、教授たちのそういう考え方は、だいたい今も変わりないのである。

しかし、一度農村に足を入れてみると、たしかに最近は「明日食う米がない」農民こそ見あたらな
いけれども、農家の生活が幸福になったとは考えられず、幸福になるための一つの手段である農業技
術をとってみても「農学」の発展とはあまり縁がなく、普及員や農協の営農指導員は「試験場や大学
は、いっそう自分たちを応援してくれぬ」といい、農民は農民で、また、そういう普及員や営農指導
員をさえ、さっぱり役に立たないと非難している。

結局、事、農学に関しては、農民と農学を学ぶ者との間に断絶があるだけでなく、農学を学ぶ者の
各層や各グループの間にも断絶がある。つまり、農学をとおしての人間同士の対話はないのである。
私は、まずこれはどうしても間違いだと思ひ、農民が幸福になるためには農学がヒューマニズムによ
って貫かれなければならないと思うのだが、私自身、頭でそう考えるだけで自信がなく、そのこと
が、なんともいえない近頃の淋しさの根本原因なのである。思えば、過去三四年も農学で飯を食わせ
てもらってきたし、今後も、おそらく、それ以外に生きて行く道はないと思う。だから、自分として
は、たとえどんなにちっぽけでも、まともな農学を身につけたい。もしそうでなければ、自分の人生
の基盤はついに固まることがないからである。

そこで、私は驚馬どに鞭打ってなんとか前へ進もうと決心した。そして、そのために、あえてこの本
を書くことにしたのである。幸い、私のなやみは、決して私一人のものではない。私は、現在、至る

所に同じなやみを持つ友だちを見つけることができる。彼らは研究者であり、技術者であり、評論家であり、ジャーナリストであり、学生であり、そして多くの農民でもある。彼らは、なやむことによって、お互いの断絶に挑戦しており、よく見れば、すでに、かなりの成果をあげている例もある。私は、まず自分が過去にやったことや現在やっていることや今後やろうとすることを、もう一度よく考えながら多くの人びとに話しかけ、多くの人びとに学んで行ける所まで、行ってみようと考えたのである。

昭和四八年一月十日

菱沼達也

再版によせて

は し が き

この秋、来日した朝鮮民主主義人民共和国の科学者たちと話しあう機会があったが、彼らは科学を朝鮮人民の幸福のために研究しているといった。ところが、これに対して日本の科学者の代表は、科学の自主的民主的総合的な発展に努め、その成果が国民生活に正しく反映・浸透されることを願っているといった。端的にいうと朝鮮の科学者の場合は人間を念頭において学問に励む（人↓学）のに、日本の科学者の場合は学問の発展が人間を幸福にする（学↓人）というのである。私は前者の姿勢に賛成する。なお、後者の姿勢からは必然的に「基礎科学」とか「基礎的研究」の尊重（ともすると「応用科学」とか「応用的研究」の軽視）が出てくると思う。第一章を読む時に、お考え願いたいことである（四八、一一、七）。

目次

第一章 農民不在ということ

- 一、私が苦しんだ研究の盲点
——シロカキはなんのためにするのか……………10
- 二、農民に教えられた実験の方法
——水田の泥はなぜいつくのか……………17
- 三、学生の気持ちを明暗にわけけるもの
——農民との交流の有無……………27
- 四、まずトラクターがある試験場の研究……………32
- 五、技術研究者の反省とストレス……………36
- 六、宮沢賢治に見る農学のあり方
——その施肥設計の詩から……………108

第二章 農民の實踐に学ぶ

一、生活から出發するカウツキーの論法	二〇
——その『農業問題』を読んで	二〇
二、農民の生活の分析	二四
三、農民の技術の分析	一八六
四、農民のものの考え方	二九
五、農業を考える者のものの考え方	二五
六、ここが指導者の盲点ではないか	二七〇
——生活の知恵発掘の怠慢	二七〇

目次

第三章 農学の歴史をふりかえる

一、明治期のヒューマニズム	二七六
——松方の『勸農要旨』と前田の『興業意見』	二七六

二、農学の出発は天降りでなかったけれど	
——評価不足だった老農の技術……	二九二
三、フェスカを嘆かせた農学の基盤の貧困……	三〇〇
四、学風改善に失敗した「総合農学」	
——そのぼかさされた人間追求……	三〇六
五、村と学校を結ぶ試み	
——東京教育大学農学部成田分室のこと……	三二七
六、農学研究のための提言……	四三〇